

# ジェームズの描くアメリカ娘たち

—— 中期短篇小説を中心にして ——

市 川 嘉 章

(1)

Henry James の国際主題における独創性は、アメリカと旧世界の単なる風俗習慣の違いを対照的な面白さとして描き出すところにあるのではない。もしそのような皮相的観察だけに終わってしまえば旅行者の見聞と本質的に同じであり、文学としての生命力を保ち得ない結果となったであろう。彼の作品の深い構造へと考察を掘りさげるならば、主題とその奥に宿る作者の意識との特異な係わり合いを、ジェームズがいかなる技法で表現しているかという点に、この芸術家の独自性を見いだすことが出来る。

ジェームズに私淑したといわれる Graham Greene は、国際的なテーマに対するよりは、むしろ題材の裏に秘められた作者の悪に対する倫理的な意識に注意を向ける。「〔経験の〕根は、ヴェニス、パリ、ロンドンにあったのではなく、彼自身の内にあった。」<sup>(1)</sup> とカトリック作家のグリーンは考えて、ジェームズの新旧両文明への姿勢を倫理的に捉えようとする。これはグリーン信仰の立場からの見解と言えようが、同時にこのイギリス人にとっては、アメリカ人ジェームズの持つ悩み、すなわち文化的な落差の意識から生ずる苦悩にはなじめないという旧世界の立場がある。

これに対しアメリカの批評家 Yvor Winters はその著 *Maule's Curse* において、ジェームズの倫理的な意識を追求するのに、あくまでアメリカ対旧世界の拮抗という関係の中で捉えようとして次のように説明する。

第一に、この倫理意識〔ピューリタニズム〕がいかに強くアメリカという場で、実際のそして歴史的な展開をしたか示すことが出来る。第二に、新興の地方文明と、その源である更に豊かな文明の間に、幾世紀ものあいだ存在した精神的な対抗関係、言い換えれば地方文明が多少なりとも典型的なその地方独自の倫理的な優越感をもって、明らかに優位にある母胎の文明に出会って抱く対抗心、というものの極限にまで精妙化された展開を、我々はジェームズに見いだす。<sup>(2)</sup>

更にこの批評家ウィンターズは、アメリカ人がヨーロッパでの経験を豊かにする過程で、その道徳性を喪失する関係がジェームズの国際主題における基調をなしていると考える。<sup>(3)</sup> これはアメリカ人の立場からの発想であり、作者ジェームズに対する同胞としての共感がにじみ出ていると言えよう。そしてウィンターズは主として後期の長篇小説を念頭において、このような一般論的な考察を進めているのである。

ここで取り上げた研究では国際主題を扱った五つの中期短篇小説を選び、おおむねウィンターズの考え方に基づいて、すなわち、「国際状況」の中で作者の描くアメリカ娘たちに焦

点を絞ってみたい。ウィンターズの展開した一般論がジェームズの短篇小説にも当てはまるであろうか。作品へのアプローチには、Leon Edel の各短篇に対する分析と評価を参照しながら、あくまでテキストの言葉に密着し、また技法の狙いを検討してみたい。言葉を大切にしたい。文体の彫琢と技法の効果を心掛けたこの作者を理解しようとする時、内容は形式と切り離して考えられないからである。

レオン・エデルはこれら短篇小説について、「それらから作者が長篇小説における女主人公の肖像を描こうとした一連の下絵にすぎない。」<sup>(4)</sup>と述べている。たしかにこれらの短篇は、しばらくの時を経て開花した Major Phase における長篇の萌芽にすぎないかもしれない。しかしそれら短篇だけを取り出して見ても、独自の特徴と価値とを備えた作品であることに異議を唱えることは出来ないであろう。ジェームズはこれら短篇の中で、アメリカ的な資質が最もはっきりと凝結した存在である女主人公の生き方と運命をいかに描き出しているであろうか。作品の文体と技法とを手掛かりにして、作者が国際的な状況に対して抱く特異な意識、すなわち作品の内容へと迫ってみたい。

## (2)

*Madame de Mauves* は、爛熟したヨーロッパ世界の不道德への誘いを拒否する女主人公のピューリタンの厳格さを際立たせている。伝統的な旧世界への憧れを抱くアメリカ娘の Euphemia Cleve は、the best birth is the guaranty of an ideal delicacy of feeling (II, p. 129)<sup>(5)</sup> という信念に基づいてフランス貴族との結婚生活に入ったが、夫の M. de Mauves の不貞によって彼女の夢は潰えさる。貴族社会の裏面を知って不幸な日々を送るモーヴ夫人の前に、アメリカの青年 Longmore が現われて夫人を慰める。物語は大体この純真な青年の視点を通して展開される。モーヴ夫人の神秘的で病的な翳りが、異常な美しさをもってロングモアに迫ってくるのは、青年の内に宿る真摯な資質が夫人のそれと共鳴を起こすからであろう。(III, p. 145)

青年の出現を捉えて、モーヴ氏は夫人に対し、ロングモアと親しく情を通じることにより “Take your revenge, console yourself.” (VI, p. 180) とさえ慫慂する。彼女を腐敗した世界から救い出そうと手を差し伸べる青年に向かって、ロングモアに対する彼女の信頼感を裏切らないでほしい、そして “Don't disappoint me.” (VIII, p. 194) と夫人は断固たる拒絶の姿勢を貫く。これは彼女自身も認める如く「強情で、付いて離れぬ、確固不動の道德意識 (conscience)」(V, p. 171) が、夫の不純な慫慂に拒絶反応を起こしたためである。ロングモアが、“with her to love once is to commit one's being forever.” (V, p. 173) と心を沈ませて定義するモーヴ夫人の生き方は、夫にとっては余りにも厳しく固苦しい。伝統の中で醜態する頹廢を暗黙のうちに容認しようとする夫やその妹にとって、夫人はあくまで同化し得ない異質の存在である。

物語の結末で、再び夫人の愛情と許しを求めるモーヴ氏に対し、She was stone, she was ice, she was outraged virtue. (IX, p. 209) という metaphorical な表現で描写される夫人は厳しく反応して夫を死に追いやる。絶望の花の哀れさから、一転して今や残酷なままでにかたくなで冷たく、内には right と wrong の峻別を求めてやまぬピューリタンの倫理意識<sup>(6)</sup>を煮えたぎらせる女へと変身する。*The Author of “Beltraffio”* の中で、純真無垢な

息子を死に至らしめる Mrs Ambient と一脈通じる鬼気をモーヴ夫人は持つに至る。我々はこのようなビューリタニズムの化身の創造に、芸術至上主義者ジェームズの創作に対する非情な心を見いだす。

この作品における技法上の問題点は、観察者たるロングモアの物語における立場であろう。彼は女主人公に対する同情心に支配されるため、公正な観察者としての距離を彼女から保ち得ない。ロングモア青年の視点が夫人の立場に偏ることによって、視点の客観性、中立性を損ね、その結果は読者への説得力を弱めてしまう。

更に不自然なことに、ずっと女主人公に密着していたこの観察者は物語の末尾に至り、*The truth is, that in the midst of all the ardent tenderness of his memory of Madame de Mauves, he has become conscious of a singular feeling, — a feeling for which awe would be hardly too strong a name.* (IX, p. 209) と述べて微妙な気持の変化を示す。すなわち、それまで愛の対象であったモーヴ夫人に対し今や尻込みの姿勢をとり、彼女を冷たく突きはなして見つめる観察者へと変身する。レオン・エデルが、“the narrator in the quiet shudder”<sup>(7)</sup> と呼ぶこの唐突な態度の変化は、公正と思われた観察者に対する読者の信頼感を裏切る結果となる。エデルは更に語を継いで、「愛情のロマンチックな映像に対するモーヴ夫人の偏狭で独りよがりの執着は、*Madame Bovary* が修道院で読んだ恋愛物と変わりが無いと知って、現代の読者はどのように評価すべきか迷ってしまう。」<sup>(8)</sup> と述べている。ひっきょう、作者の意図に反して余り芳しくない女主人公の印象が読者に与えられるのは、観察者たる視点の人物の態度に対する読者の評価に混迷が起こるからである。

皮肉なことに、悔い改めながらも夫人の報復を受けたモーヴ氏の方が、かえって脆くもあわれに迫ってくる。人間味に欠けた執念深い妻による被害者として、彼は読者の心に映るのであろうか。また、モーヴ氏の妹の *Madame Clairin* が義理の姉モーヴ夫人に対して、ロングモアとは全く逆の光を当てて夫人の硬直性を抉り出すところに、古い文明を背後に持つ eavesdropper の魅力を感じさせる。しかし、このように新旧両文明が衝突する場で、我々が旧世界にくみしたくなるのは、無垢な魂を持った女主人公が結末で、被害者から加害者へと不自然な変貌を遂げたためでもある。

## (3)

*Four Meetings* では、語り手の「私」が Miss Caroline Spencer との四たびの出会いを綴る。ヨーロッパに対する強い憧憬を抱いてフランスへ旅立つが、そこで彼女の無垢ではあるが無知な魂が、旧文明により腐敗堕落した従兄弟の狡猾な泣き落としにより受難の道を歩む。「私」は初め同情をもって、後には軽蔑の気持を加えて、彼女の姿を描き出すが、抑制のきいた観察者の視点は貫き通す。

スペンサー嬢を見つめる語り手は、距離をおく観察を続け cynical な好奇心を満足させる。犠牲者に援助の手を差しよべるような介入は強くつつしみ、観察者の枠からはみ出ることはいない。この語り手の特色はどのような効果をもたらしているであろうか。レオン・エデルは、「この作品における主人公カロライン・スペンサーの憧れ程、“American nostalgia for Europe” を鮮明に描きだしている作家はほかに居ない。」<sup>(9)</sup> と述べて、Chekhov の三人姉妹が抱くモスクワへの切ない想いに比べている。読者にこのような pathos の効果を与え

るのは、*Daisy Miller* と同様に、女主人公自身の無知によって惹き起こされた悲劇が直接的な形ではなく、中立的な観察者の視点を通して描かれるからである。この視点は“a chasteness of narrative”<sup>(10)</sup> の立場を守って、悲劇の対象から心理的な距離をおき、それを哀愁へと和らげて読者に示すいわばクッションの働きを果たす。

「国外に余りにも長く住みついてしまった」(II, p.157)<sup>(11)</sup> アメリカ青年 Winterbourne の目に、アメリカ娘 Daisy Miller は奔放ながら無垢な美しさに輝いて映る。ジュネーヴの、さらに古都ローマの社交界で、彼女が sophisticate された同胞の響きを買うのは、異郷にあって困習の軛に縛られず、アメリカ的な生き方を押し通そうとする無鉄砲さの故である。レオン・エデルはこれを、「アメリカ人は何でも成就することが出来るという伝説をはぐくんだあの奇妙な新しい平等主義 (egalitarianism)」<sup>(12)</sup> に裏打ちされていると説明をする。更に、貴族制度からではなく、むしろ富の階層から生まれるこの旧文明への闖入者に対し、作者は「諷刺と批判を加えると共に、大きな愛情をもって描いた。」と敷衍する。作者のこの気持は、観察者ウィンターボーンへのディジーに対する微妙な態度に投影されていないであろうか。

“Flirting is a purely American custom; it doesn't exist here.” (IV, p.191) とウィンターボーンに忠告されたにもかかわらず、ディジーはいかがわしいイタリア人との誰憚らない交際を深める。彼女は同胞のアメリカ人社会から除け者にされても怯まない。そして物語の結末は、深夜における Colosseum での逢引でディジーはマラリアの瘴気 (a villanous miasma) に罹り、呆気なく命を落とす幕切れとなる。Daisy refuses to yield her innocence.<sup>(13)</sup> の帰着として、彼女がヨーロッパ社会における腐敗の犠牲者になったのはけだし当然であろう。我々は、無垢な存在が俗悪な環境の中で敗北と死を迎える光景に、「滅びの美しさ」を感じてしまう。レオン・エデルは女主人公の死について、汚れないひな菊 (daisy) が文字通り mal aria (bad air) に触れて枯れ果てるという象徴的な表現を見いだしている。<sup>(14)</sup>

彼女との最初の出会いから、観察者のウィンターボーンは余りにも自由奔放なディジーにとまどうばかりである。その反面、新鮮な魅力に心惹かれざるを得ないという dilemma に陥る。しかるにあやしげなイタリア人と彼女の逢引を目撃して、彼はいかなる反応を起こすであろうか。

Winterbourne stopped, with a sort of horror; and, it must be added, with a sort of relief. It was as if a sudden illumination had been flashed upon the ambiguity of Daisy's behaviour and the riddle had become easy to read. She was a young lady whom a gentleman need no longer be at pains to respect. (IV, p.202)

彼は社交界での悪名高いディジーとの係わり合いから身を引く契機をここに掴み得て、dilemma から解放され内心ほっと安心をする。これは登場人物から一定の距離をおいて観察者の姿勢を保とうとするウィンターボーンの資質を浮き彫りにしている。

ディジーの死後、その潔白なことが明らかになった時、ウィンターボーンは彼女を誤解していたことを恥じる。そして女主人公の無邪気さと観察者の誤解とが、読者に二重に浮き彫りにされる結果、ディジーの悲劇が哀愁へと和らげられて伝わる効果を生む。Wayne C.

Booth は、これを「ディジーの破滅から生ずる悲しみを和らげようとする」<sup>(15)</sup> ジェームズの技法であると説明する。しかし、一般読者の意識に上るのは、技巧の痕跡ではなく、技法のもたらす効果である。

(4)

*The Siege of London* は San Diego の女性 Nancy Headway がロンドンの社交界入りを果たす成功譚である。アメリカにおける何回もの離婚歴は、当然 a tax on one's credulity (I, p. 23)<sup>(16)</sup> ではあるが、彼女は前歴に怯まない。ナンシーの過去を知っているのは友人の Littlemore だけであり、物語は彼とその友人の外交官 Waterville 二人の視点を通して展開される。リトルモアの目に映る彼女は、青白い上品なタイプとは対照的に描かれている。She was a genuine product of the far West — a flower of the Pacific slope; ignorant, audacious, crude, but full of pluck and spirit, of natural intelligence, and of a certain intermittent, haphazard good taste. (I, p. 24) ナンシーが持つこれら特質の全体を包含する一つの概念を、ジェームズは“provincial”（地方特有の）という言葉で表わし、その資質が示す固有の強さを展開する。(III, pp. 42—3.)

しかしリトルモアは、この provincial な女性が respectable でないことをはっきりと知っている。ナンシーはイギリス青年貴族の Sir Arthur Demesne の心を虜にして、“I want to get into society.” (II, p. 34) という願いを一步実現に近づける。アーサー卿が心惹かれたのは彼女の異質性 (foreignness) であり、それはアメリカ人の provincial な特質の一つに対するイギリス上流社会の好奇心を代弁している。母親 Lady Demesne の強い反対で、この青年貴族はナンシーに心惹かれながらも結婚をためらう。リトルモアがアーサー卿に対し、「彼女は respectable である。」と保証するようにナンシーが画策する時、なりふりかまわぬアメリカ的な provincialism の押しの強さをあらわにする。

アーサー卿とナンシーが婚約によって両者の関係を確実なものとしたとき、観察者のリトルモアは初めてレディ・ディメーンに、“I don't think Mrs Headway respectable.” (X, p. 109) とナンシーに対する自分の評価を開陳して態度を鮮明にする。このあと彼は自分の気持を次のように分析する。He felt no discomfort, no remorse, at what he had said; he only felt relief. Perhaps it was because he believed it would make no difference. It made a difference only in what was at the bottom of all things — his own sense of fitness. (同上) すなわち、彼は二人の結婚に影響を与えない中立的な立場を守ったと共に、母親のディメーン夫人に対しても真実を隠さなかったという観察者としての良心を満足させているのである。

レオン・エデルは、「ナンシーの奇妙なアメリカニズムと大胆な態度の力量によって、彼女は大成功を収めた。」<sup>(17)</sup> と述べている。これを換言すれば、アメリカ人の provincial な力がイギリス貴族社会に対して勝利を博したということになる。ロンドンの攻略は成功したのである。ところで、この女主人公とロンドン上流社会の攻防を“a rich vein of high comedy”<sup>(18)</sup> のムードで描き得た要因は何であろうか。第一に、アメリカ娘の敗北というジェームズ小説の定型を破り、題名が示す如く provincial な資質が伝統的な世界を征服するところに、新鮮で痛快な面白さが感じられる。第二に、二人の観察者が登場人物のどちらにも偏らない

立場に立ち、冷笑的な精神に充ちた視点を通して、両者の対決をスケッチ風に描いているところから喜劇的な雰囲気醸し出す。

*Pandora* では観察者がアメリカ人ではない。ドイツの青年貴族 Vogelstein の目を通して、題名のアメリカ娘とアメリカ文明とが眺められるという従来とはおもむきの異なった配役設定がなされている。この青年は作者によって、a stiff conservative, a Junker of Junkers (I, p. 359)<sup>(19)</sup> と規定されるが、新興文明への見聞を広めようとする熱意と好奇心とに満ちている。ワシントン領事館付書記官として赴任する途中、彼は船中でパンドラに出会う。彼女は魅力的ではあるが、ディジー・ミラーとは全く対照的なタイプとして描かれている。すなわち、「ディジーよりはるかに真面目で、他人のつけ込む隙がなく、また男性に近づくことに全然興味を示さない。」(I, p. 368) 一家を取りしきるしっかり者であり、またフランス文学の高踏的な書物を読破する知性にも恵まれている。the best things に触れるため家族全員でヨーロッパ旅行を経験するが、その折にディジーの如く汚れた旧世界と接して挫折した形跡もない。すなわち、ジェームズの描く女性像の中でパンドラは完璧性に最も近い。

フォゲルシュタインはパンドラに心惹かれながらも、“social position” の不詳なアメリカ娘に用心深く構える。アメリカ上陸で一旦はつながりが切れたものの、再び偶然に出会ってみると、彼女はアメリカ合衆国大統領に堂々と懇願をする社交界の花に成長している。フォゲルシュタインに一層美しく映えるパンドラは、実はすでに婚約しており、未来の夫のためにオランダ総領事のポストを首尾よく大統領から獲得する。彼女の婚約を知りフォゲルシュタインは複雑な感情を抱く。彼にとってパンドラの玉手箱から飛び出したものはどのようなショックであったろうか。

This was a fact which seemed to Vogelstein to finish the picture of her contradictions; it wanted at present no touch to be complete. Yet even as it hung there before him it continued to fascinate him, and he stared at it, detached from surrounding things and feeling a little as if he had been pitched out of an overturned vehicle, …… (II, p. 410)

婚約者の出現によって、ひっくりかえった車からほり出されたような衝撃を受けながらも、フォゲルシュタインは彼女の彌増す美しさを偏見なしに受けとめることにより、ジェームズ小説における観察者の資格を保つ。

典型的な保守主義者であるこのドイツ青年貴族は、民主主義の国アメリカの諸制度に対し懐疑的であり、そのシンボル the Capitol を “a hideous place” と呼ぶ。(II, p. 400) これは作者のアメリカ文明に対する偏見をこの青年に代弁させているとみられる。<sup>(20)</sup> これに対し、パンドラはアメリカ的なものに対し何ら劣等感に悩まされることなく心を開いてそれらを受け容れ、知的な食欲を満たす。パンドラはどんなタイプの女性かという彼の質問に、友人は “My dear Vogelstein, she is the latest, freshest fruit of our great American evolution. She is the self-made girl!” (II, p. 396) と説明をする。彼は She was possible, doubtless, only in America; American life had smoothed the way for her. (II, p. 397)

という観察者としての感想を抱く。すなわち、彼女の特質はアメリカの土壌を抜きにしては考えられない。パンドラの内に『ロンドンの攻略』の女主人公ナンシーと同質の力強い provincial な資質を我々が見いだすのは容易である。

旧世界の代表者フォゲルシュタインは、アメリカ内陸部出身のこの積極的な娘との対決に絶えず押され気味で、“the resilience and daring of American young women”<sup>(21)</sup> の証拠を見せつけられる。すなわち、アメリカ人が被害者の立場に置かれるというジェームズの典型的な国際状況が、ここでは周到な倒置を示している。作者の皮肉な作意によって、『ディジー・ミラー』の哀愁とは異質の “a light vein of ironic comedy”<sup>(22)</sup> が脈打っているのを読者は感じるのである。

## (5)

Herbert Read は、ジェームズにおける芸術的意識の二重性 (dualism) がその彼の特質であると考えて、その特質の起源を作者の特異な生い立ちに求める。この批評家によると、ジェームズはピューリタン精神の世界で最初に自意識に目覚め、それに続いて感性的な地中海ヨーロッパ文明へ投げ入れられた。そしてこの互に相反する二つの文明に対し、「ジェームズはあくまで識別しようとする精神を保持していた」<sup>(23)</sup> が故に、その精神の緊張感がずっと彼の芸術を支えていたと説明する。リードは更に自説に沿った見解として Pelham Edgar が示した分析を引用する。すなわち、「ジェームズをジェームズたらしめているのは、*naïveté* と *sophistication* のたぐい稀な結合であり、それが彼の性格に型を与え、彼の作品に「二つの要素を」峻別する素質を与えているのは尤もなことである。」<sup>(24)</sup> これらの考え方の光に当ててみて初めて、『マダム・ド・モーヴ』『四たびの出会い』『ディジー・ミラー』各作品の女主人公が、各々旧文明に触れて繰り広げる悲しくも哀れな反応の意味を辿ることが出来るのではなかろうか。これらの短篇では、作者の典型的な国際状況である innocence 対 convention の葛藤の中で、被害者の立場に置かれたアメリカ娘たちの悲しみがスケッチ風に描かれている。

これに対して、『ロンドンの攻略』『パンドラ』の女主人公達は、無垢と無知による脆さとは無縁な存在として描かれている。彼等はあらゆる手段を行使して establishment の中へ斬りこみ、その中に同化する知恵と力とに恵まれている。アメリカ的な無邪気を宿しながらも脆さはない。作者は更に、主人公の戦いを惨めな敗北に終らせることはしない。ロンドンやワシントンの社交界を席卷し風靡するという、いわば逆転勝ちの結末をもたらすことによって、provincial な活力に満ち溢れるアメリカ娘の一つの型を創造する。従来の innocence 対 convention という二元論の埒外に出てしまう新しい要素として、provincialism という概念がナンシーとパンドラ両者に与えられると考えられる。

ところが、この provincial な女主人公の展開は、短篇に限ってみるとこの二作をもって唐突にも終りを告げてしまう。これは何故であろうか。ジェームズがこのように断念をした謎を考えてみたい。管見によれば、作者が断念した理由は二つ考えられる。まず第一に、ジェームズは provincial なタイプの主人公をこれ以上展開することに興味を失ってしまったといえよう。この作者の把握するヨーロッパ文明に偉大さと頹廢の両面が認められるように、彼のアメリカ的な provincialism の把握にも、光と影の二つの特質が浮き彫りにされる。

辞書的な定義によれば、provincial とは(1)「その地方特有の (local)」という語源からくる意味と、そこから派生する(2)「粗野な (coarse, vulgar)」という悪い意味の両面を持つ。ナンシーとパンドラについても、アメリカ人特有の逞しさを長所として持つ反面、伝統的な洗練、優美さに欠ける憾みがある。naïveté から sophistication へと志向するジェームズにとって provincialism との乖離感が胚胎し、このタイプの展開に懐疑的になったと考えるのはこじつけではあるまい。

後期の長篇 *The Ambassadors* はじめ三つの作品をひっさげて国際主題へ再び立ち戻った時、ジェームズは未熟な文明を持つアメリカで審美的に充実した生を営む難しさを指摘する。これら作品における作者のアメリカ文明に対する位置づけを、リードは次のように説明する。「より散文的な表現をすれば、Strether の典型的な意識の中に、我々は二つの文明の相剋に気づく。それは文明とその対極にある未開 (barbarism) の二つと言った方が、より正確であろう。」<sup>(25)</sup> 作者の後期において、アメリカ新興文明は正統的な文明に対立する存在として barbarism, あるいはもっと言葉を和らげて、文明の片隅に位する provincialism (片田舎) という評価しか与えられていない。この結果から判断すると、中期短篇における provincial な存在の芽は発育の途中で摘みとられたとしか言いようがない。しよせん、highbrow のジェームズは上品さ (decency) に対する嗜好は持つが、アメリカ人固有の逞しい資質とは体質的に相容れなかったと考えられる。また、この点が読者に訴える力の限界をもたらしたといえよう。被害者の悲しみを醸し出すことがないからである。

作者がこのタイプの主人公の展開を断念した第二の理由として、互に両立しない新旧両世界のスケッチ(素描)で終わってしまう短篇小説が持つ限界に、作者が気づいたのではなからうか。『ロンドンの攻略』と表裏一体の関係にある短篇 *Lady Barberina* についてレオン・エデルは、「この物語の真髄は両世界の批判にあるのではない。血統とその硬直性を特色とする貴族社会に対する、富とそのひけらかしを特色とする貴族社会の不一致を把握することにある。」<sup>(26)</sup> と述べている。不一致 (incompatibility) の単なる表面的な描写が短篇でなし得る最大限であり、その袋小路を悟って断念の気持が働いたと考えられる。後にジェームズが登場人物の視点を通して、爛熟から頹廢へと傾いて映るヨーロッパ貴族社会の運命に対する危機感を、精緻に表現しようと試みたのが長篇においてであったのは、けだし当然の成りゆきと言えよう。

## (6)

しかしながら、ジェームズの短篇におけるこの断念は、ここで取りあげた五つの短篇の *raison d'être* を否定するものではない。これら一連の作品を比較検討することにより、内容的には国際主題に対する作者の意識を探りだせようし、また形式の上からもこれらの多くは作者の技法の特色を知る上に恰好な短篇作品であることに変わりがない。

まず内容的にみて、ジェームズが描くアメリカ娘たちの旧世界に対する抵抗、挫折、敗北、そして勝利という様々な結果をもたらす資質は、互に懸隔しているため焦点が絞りにくく、従って彼等の肖像画から共通の特質を導き出すことが難しいのは当然である。しかしそれら多様なタイプのアメリカ娘たちを見つめる観察者へと溯ってゆくと、ジェームズ自身の登場人物に対する一つの共通ともいべき意図を垣間見る。そして更に、作者がヨーロッパ



文明に対して抱く特異な意識が、女主人公たちの生き方と運命に反映されているのを感じざるを得ない。その意識をやや卑近な言葉で呼ぶことが許されるならば、筆者は「ジェームズにおける文化的劣等感コンプレックス」として把握したい。先輩 Hawthorne が得た教訓として、「芸術の花は土壌が深いところにおいてのみ開き、僅かな文学を生みだすにも長い歴史が先行し、作家を芸術活動に向かわせるのも複雑な社会の機構を必要とする。」<sup>(27)</sup> とジェームズは『ホーソン論』の冒頭で述べている。このことから、作者ジェームズの劣等感はずいぶんアメリカ文明に対する一種の偏見によって裏打ちされていると言えないであろうか。

このような心理状態にある作者は、アメリカ文明の未熟な面を補い、優位にある旧世界に対抗し得る精神的な支えを同胞の特質の中に暗中模索したにちがいない。具体的には、モーヴ夫人のピューリタンの意識の燃焼、『四たびの出会い』『ディジー・ミラー』におけるアメリカ娘の脆さと挫折に現われる無垢な美しさ、そして更にこれらと対照的な資質として『ロンドンの攻略』『パンドラ』における provincial なものの力強さ等がアメリカ人の旧世界に拮抗すべき美的要素として触発され、ジェームズの心中に芽ぶいたと考えられる。心理学的に言えば、劣等感コンプレックスは当然その裏に優越感コンプレックスを包含して、心理学的な均衡をはかるからである。<sup>(28)</sup> そして、読者に強く訴えるのは、優越感コンプレックスよりはむしろ、劣等感コンプレックスが「女主人公の滅び」という結末に表われている時ではなかろうか。

外国文化に接しての衝撃 (cultural shock) から、人はしばしば chauvinism (盲目的愛国主義) へと反動的に走るのは、劣等感のなせる極端なわざとしてよく知られている。ジェームズの場合は、それとは比較にならぬ程の複雑な精神的屈折を迎るのであるが、彼の心の底には優位に立つ文明への劣等感が、拭い去ることの出来ない意識としてわだかまっていたと認めざるを得ない。すなわち、ジェームズの文化的劣等感が彼の創作意欲を刺激して、旧文明と対決すべき多様な女主人公の肖像が生みだされたと考えられる。心理学的に言えばカタルシスが起ったのである。そして、批評家ウィンターズが旧世界に対するアメリカ人の道徳意識と呼ぶ対抗関係も、作者のこの劣等感から生まれた一つの型として理解されることが出来る。

しかるに、技巧の作者ジェームズは、自分の抱く偏見または劣等感を正直に素朴な形で表わすことはしない。小説の枠内に観察者の視点を設定し、その視点の窓を通して作者自身の意識を間接的に覗かせる。従って、主人公、観察者、そして作者は互に間隔を保ちながらも微妙な関係を絡ませているので、読者に屈折したニュアンスの効果 (impact) をもたらすと言えよう。この技法の読者に与える効果は個々の作品によって微妙に異なっているが、ここで取り上げた作品に共通して言えることは social comedy の色彩を添えていることである。レオン・エデルは、「軽快なタッチと主題の悲劇的な要素だけでなく、皮肉で哀調を帯びた、また喜劇的な要素の展開を可能にした」<sup>(29)</sup> 作者の技法を評価している。まさにこれらのニュアンスを生み出したのはジェームズの巧緻な手法にほかならず、この表現方法の獨創性によってこれら短篇が内容の芸術的生命を新鮮に保っていると言えよう。

ジェームズは全知的な (omniscient)、あるいは複合遠近画法 (multiple perspectives) を避けて、もっぱら単一遠近画法 (a single perspective) を通して彼の意識の世界を描きだした。<sup>(30)</sup> しかもその単一遠近画法は、「事件の外側から読者に語りかける隔離された存在の視点でなく、事件の枠内にある存在の視点」<sup>(31)</sup> に基づくべきことをジェームズは主張する。し

かしながら、「全知的な語り手の権威的な単一視点に代って、多数の視点による相対性が次第に妥当なものとなっている」<sup>(32)</sup> 現代において、一貫して単一視点に固執したジェームズの技法は、やや古典的な様相を帯びている嫌いがあるのは否定出来ない。このことについて *The Nature of Narrative* の著者は、「現代の読者にとって、語り手は劇的な形式に位置づけられるよりは、むしろ相対化される必要がある。少しも疑わしくなく、また皮肉な吟味に晒されないような語り手は、現代の読者にとって最も鼻もちならない。」<sup>(33)</sup> と述べてジェームズの持つ非現代性を指摘する。

それにもかかわらず、これら短篇の魅力を保つ技法上の鍵は何であろうか。結論を先に言えば、「物語における四要素、すなわち登場人物、語り手、作者、そして読者それぞれの視点が食いちがいの働き (function of disparity) を示す時、それは irony となって多様で微妙なニュアンスの効果を読者にもたらす。」<sup>(34)</sup> という一般論が、ジェームズのこれら短篇にも適用され得るのではなからうか。すなわち、女主人公と語り手または観察者の視点のずれが、ジェームズの技法として読者に対する直接的な impact を和らげる働きをする。

生国アメリカに対する偏見とヨーロッパ世界に対する劣等感コンプレックスが、古典的な技法と相まってジェームズの世界に、ある種の視野の狭さをもたらしているのは否むことが出来ない。その反面、作者の繊細な意識と精妙な技法の結合が、まとまりのある単一遠近画法の世界を展開し、文体に微妙なあやを生み、彼独特の国際小説へと結晶しているのも事実である。ジェームズにとって女主人公は彼の美学の象徴であり、その美しさの展開はこの研究で取り上げた五つの短篇にも一貫して流れている。その中で彼が無邪気なアメリカ娘を、頹廢の驕りを帯びた旧世界との対決において、その被害者として登場させた時、我々はジェームズの美的な真髓に触れることが出来るのではなからうか。(昭和47年11月28日)

## 註

- (1) Graham Greene, "Henry James: The Private Universe," in *The Lost Childhood and Other Essays*, Penguin Books, 1962, p.21.
- (2) Yvor Winters, "Maule's Well, or Henry James and the Relation of Morals to Manners," *Maule's Curse*, in *In Defense of Reason*, Chicago, 1938, p.301.
- (3) *Ibid.*, p.300.
- (4) Leon Edel, *Henry James: The Conquest of London*, Philadelphia, 1932, p.311.
- (5) Leon Edel (ed.), *The Complete Tales of Henry James* Vol.3, London, 1962. 以下、テキストの引用はこの版による。また書名は *The Complete Tales* と省略して、以後引用。
- (6) Herbert Read はその著『ヘンリー・ジェームズ論』(*Collected Essays in Literary Criticism*, London, 1938) で、ピューリタニズムの特質とそれに対するジェームズの係わり方を展開している。(pp.361-2.)
- (7) "Introduction," in *The Complete Tales* Vol. 3, p.9.
- (8) *Ibid.*, p.9.
- (9) *Ibid.*, Vol.4, p.10.
- (10) レオン・エデルは *Daisy Miller* における観察者の態度の特質を chasteness と呼ぶ。  
(*Henry James: The Conquest of London*, p.308.)

- (11) *The Complete Tales* Vol.4. 以下テキストの引用はこの版による。
- (12) Leon Edel, *Henry James: The Conquest of London*, p.311.
- (13) "Introduction," in *The Complete Tales* Vol.4, p.9.
- (14) *Ibid.*
- (15) Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction*, Chicago, 1961, p.283.
- (16) *The Complete Tales* Vol.5. 以下テキストの引用はこの版による。
- (17) Leon Edel, *Henry James: The Middle Years*, Philadelphia, 1962, p.51.
- (18) *Ibid.*, p.50.
- (19) *The Complete Tales* Vol. 5. 以下テキストの引用はこの版による。
- (20) Leon Edel, *Henry James: The Middle Years*, pp.120—1.
- (21) *Ibid.*, p.120.
- (22) *Ibid.*
- (23) Herbert Read, *op.cit.*, p.361.
- (24) *Ibid.*, *Henry James, Man and Author*, by Pelham Edgar (London, 1926).
- (25) *Ibid.*, p.365.
- (26) Leon Edel, *Henry James: The Middle Years*, p.85.
- (27) Henry James, *Hawthorne*, New York, Cornell Paperbacks, 1966, p.2.
- (28) 河合隼雄著『コンプレックス』, 岩波新書, 1971, pp.60—1. 著者は劣等感と優越感の微妙な混在を, 劣等感コンプレックスの範疇に入れる。
- (29) Leon Edel, *Henry James: The Conquest of London*, p.310.
- (30) Robert Scholes & Robert Kellogg, *The Nature of Narrative*, London, 1966, pp.272—3.
- (31) *Ibid.*, p.273.
- (32) *Ibid.*, p.276.
- (33) *Ibid.*, p.277.
- (34) *Ibid.*, pp.240—1.

### Summary

#### The Portraits of Some American Girls by Henry James

Yoshiaki ICHIKAWA

Henry James's originality in manipulating "the international theme" does not lie in a superficial observation by an outsider. It lies in expressing, by the technique of point of view, the deep complications between the international situation as he understands it, and his moral attitude towards it. This study is to examine the American heroines of some international tales written during the middle period of his creative activity. This also refers to Yvor Winter's moral viewpoint of the transatlantic conflicts, and to Leon Edel's comments on each tale. In this investigation, much attention is paid to the language of the texts and to James's technique of point of view, both of which are to produce some stylistic effects on the readers' minds.

In *Madame de Mauves* a puritanically chaste girl is made a victim of her French husband who thinks adultery is not so fatal to their relation. The observer of this story, however, reveals so much sympathy for the beautiful sufferer that he seems not to be qualified to evaluate the situation objectively. *Four Meetings* shows an intense American nostalgia for Europe, embodied in an American old maid. This innocent girl is also made a victim of her corrupted cousin in France, and fails to fulfill her passion of studying the Old World. Daisy Miller, an innocent but coquettish American girl, makes her own way in spite of much criticism from her sophisticated compatriots in Geneva and Rome. She dies of malaria, which symbolizes her defeat by the corrupted world, and she proves to be the most innocent at the end of the story. The tragedies of the two American girls in *Four Meetings* and *Daisy Miller* appeal to us as pathetic stories mitigated by the buffering function of the observers' objective and fair descriptions.

In *The Siege of London*, conversely, an American lady with a past of multiple divorces succeeds in entering the London society by being engaged to a young English nobleman. Pandora also succeeds in getting a post in the diplomatic service for her *fiancé* from the President of the United States. The observers of these two tales present them in "a light vein of ironic comedy," for they are objective, critical, and not involved in the conflicts of the stories. The successful heroines' common idiosyncrasy can be defined as the American provincial quality, which proves to be invulnerable to the corrupted world. James, however, gives up the idea of developing this provincial type after this effort, because he is supposed not to be sympathetic with this provincialism on account of the defective attribute of its vulgarity.

The types of the five heroines surveyed here are varied in their ways of living and destinies. But these varied types are supposed to reflect the novelist's inferiority complex for the Old World. Out of his complex, James is supposed to create an antagonistic character among the Americans to counteract the traditional world's value. This sensitive novelist, however, is inclined to express his complex indirectly through the observer's viewpoint. James's complicate technique, therefore, leads to the rendering of delicate effects on the readers, and his originality can be found in a unique combination of his complex and technique.